平成三十年度　中等部入学試験問題　第一回（国語）

◆答えはすべて解答用紙に書くこと

一　次の(1)〜(5)の――線部を漢字に直しなさい。

(1) オンダンな気候の土地。
(2) 宿題を早めにスませる。
(3) 学生をタイショウにした講座を開く。
(4) カクチョウの高い文章だ。
(5) 新人選手がタイトウしつつある。

二　次の(1)～(5)の問いに答えなさい。ただし(1)～(3)はひらがなでもよいが、(4)(5)は漢字で答えること。

(1)　下の意味となるように、空欄に生物の名前を入れて慣用句を完成させなさい。

「□の涙」…ほんの少し。

(2)　〜〜線部が下の意味となるように、空欄に体の部位を入れて慣用句を完成させなさい。

友人のすばらしい演技に□を巻く。…大変感心する。

(3)　下の意味となるように、空欄に語を入れてことわざを完成させなさい。

「まかぬ□は生えぬ」…努力しなければ良い結果は生まれないこと。

(4)　〜〜線部の語の対義語（反対の意味の語）を漢字2字で答えなさい。

人間には幸福を求める権利がある。

(5)　次の文の空欄に漢字を入れて四字熟語を完成させなさい。

あの人の話を半□半□で聞いていたが、後に真実だとわかった。

三　次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。（ぬき出しと字数が決められている問題は、すべて「、」「。」記号などを字数にふくみます。）

2011年4月11日、私はフランスのパリ経由で、西アフリカ・モーリタニア[注1]へと向かった。パリの空港で一人、9時間の乗継ぎに耐え、出発ゲートへと向かう。ターバンを巻いて目だけを出している人に、カラフルな民族衣装に身を包んだ女性たち。待合室の時点で、すでにアフリカ風味が漂っている。アジア人は、中国人が数人いるものの、日本人は私一人だけだ。機内アナウンスはフランス語と英語で行われ、もはや日本語はない。①命綱がほどけた気分で耳を澄まし、何か重要なことを言っていないか必死に食らいつく。

怖気づいている暇などない。これからだ。これから私の新しい闘いがはじまるのだ。今までアフリカのバッタ問題が解決されなかったのは、私がまだ現地で研究していなかったからだ。無名の博士の活躍を世界に見せつけてやろうと、やる気が煮えたぎっていた。しかしこの後、②荒い鼻息はため息へと変わることになる。

無事に、モーリタニア首都のヌアクショット空港に着陸したものの、とりあえず入国拒否を食らう。係のおっさんから③「お前が住む予定の住所はこの世に存在しないので、入国は認めない」的なことを言われた。「的な」と表現したのは、何を隠そう私はモーリタニアの公用語であるフランス語を、挨拶程度しか話せない。英語がほとんど通じないのは承知しており、現地で生活していれば自然に言葉は覚えていくだろうと甘く考えていた。だが、現地生活に入る前をどう乗り切るかは④盲点だった。

「ムッシュ、ボンソワー（旦那さん、こんばんは）」

愛想よく何回も挨拶し、今できる最大限の努力を払うものの事態は一向に好転しない。こんなにがんばっているのに、なんて融通が利かない国なんだろう。研究所の所長に教えてもらった住所が間違っているのだろうか。このままではアフリカを救うどころか、入国すらできずに日本に送還されてしまう。

他の乗客はすんなり入国していき、とうとう私だけが取り残されてしまった。予定では、研究所のスタッフが迎えに来てくれることになっているので、誰かが⑤異変に気づいて助けに来てくれるのを待つしかない。

いつまで経っても私が登場しなかったのを心配し、以前会ったことがあるシダメッド（研究所のマネージャー）が、ようやく入国審査までやってきて事情を説明してくれた。おかげで、モーリタニアの地を正式に踏めることになった。

私は研究所の敷地内にあるゲストハウス（客を泊める宿泊施設）に寝泊まりすることになっていたが、係の人間は研究所の中にホテルはないと思い、入国を認めなかったようだ。

一緒に旅してきた荷物も、無事に辿り着いていた。乗客は私一人だけになっていたので今さら人間違いしようもないが、研究所のスタッフ4人が「TOKYO／MAENO」と書かれたボードを掲げて歓迎してくれている。挨拶もそこそこに、皆に手伝ってもらって大荷物を運び出そうとするも、ダンボール8箱分の荷物が不審に思われ、警備員6人に囲まれての事情聴取がはじまった。

「お金持ってるか？」と唐突に英語で聞かれたが、まだ現地の通貨「ウギア」に両替する前だったので、ない旨を伝えると、それを合図に荷物のガサ入れがはじまった。中身をチェックするのはいいのだが、ひっかきまわしてグダグダのままにする。パズルのように絶妙の収納をしていたので、元に戻すのに一苦労だ。

危険物や麻薬の類は持ち込んでいない自信があったので、余裕の面持ちで見守っていたところ、警備員に「これは何だ？」と問い詰められる。なんの変哲もない缶ビールなので、「ジャパニーズビアー」と伝えると、「ノー・ビアー」と⑥怒られた。

モーリタニアの正式名称は「モーリタニア・イスラム共和国」。イスラム教徒は酒を飲むことが禁じられているが、他宗教の人は飲んでもかまわないと聞いていたので、遠路はるばる持ってきたのだが……。持ち込みもダメとは露知らず、続々と缶が発見されていく。砂漠でキンキンに冷えたビールを飲むために、クーラーボックスまで持ってきたのに……。奪われていく夢、希望、未来。

追い討ちをかけるように、パリの空港で買ったウイスキーのボトルにまで魔の手が迫る。販売員のお姉さんから「モーリタニアには一人2本までなら持っていってもいいわよ」とお墨付きをもらっていたのに……。いや、持っていけるとは言わ

れたが、持ち込めるとまでは言われていない。

「これはビールじゃないから問題ないはずだ」と訴えるも、酒の持ち込みはダメだと却下される。結局、ビール10本とウイスキー2本、すなわち全ての酒を没収された（後に、賄賂をもらえなかった腹いせだったと知る）。

⑦なんたることだ。運べる荷物が限られていたので、味噌を断念し、代わりに酒を持ってきたというのに、没収されるとは何事か（怒）！　モーリタニアには酒屋はないと、飛行機で隣に座ったオランダ人が言っていた。もはや禁酒生活は避けられない。深い絶望の淵に追いやられ、アフリカを救ってやるぞという意気込みは過去のものとなった。

一連の没収劇を観戦していた研究所のスタッフたちは「コイツは一体何しに来たんだ？」と完全に呆れ顔だ。うむ、華麗に出鼻をくじかれた。

悲しみにくれながら、車に乗り込んで研究所に向かう。研究所に到着すると、運転手はクラクションを鳴らしまくり、門番を叩き起こし、鉄製の重々しい大きな扉を開けてもらう。

平屋の⑧ゲストハウスは白肌のコンクリート造り。カギを受け取り、そっと玄関の扉を開けて中に入ると、部屋の前には造花が飾られ、歓迎ムードたっぷりだ。ゲストハウスには3部屋あるが、今は誰も住んでいないとのこと。私が初めて長期で泊まることになる。

8畳ほどの部屋の中には、キングサイズのベッドに机、クローゼット、タンスが備わっている。花柄のカバーがベッドを包み込み、エアコンが優しげにさわやかな風を送ってくる。トイレとシャワーが個室ごとについている。ベッドの脇には小型の冷蔵庫もあり、開けてみるとフルーツの盛り合わせとジュースがズラリと並んでいた。しかも、机の上にある新品の箱ティッシュは開封され、頑固な一枚目が塊で飛び出している。ここまでキメの細かいおもてなしをしていただけるとは……。共有のリビングは、20名は収容できる広い部屋で、ソファーもある。

なんという高待遇なのだろう。このお礼は研究成果で返そうと心に誓い、今日のところは眠りにつくことにした。35時間ぶりに横になれる。北枕にならないようにコンパスで方角を確かめると、すでに枕は東向きに配置されていた。ここまで気

が回るものかと感激しながらも、酒の恨みでふて寝した。

翌朝、シダメッドに研究所を案内してもらう。2年前に訪れたときは平屋だったのに、2階建ての立派なビルになっている。引っ越ししたのかと尋ねたら、「このビルは去年建てたもので、昔の研究所は塀の向こうにある」と言う。

世界銀行からの支援で研究所を建てるついでにゲストハウスも建てたそうだ。ゲストハウスがあるということは、頻繁にお客さんが来るのだろう。

実は、砂漠の真ん中にポツリとある田舎町に研究所の支店があり、私はそちらで寝泊まりするつもりで来ていた。支店の裏には果てしない砂漠が広がっている。相当厳しい砂漠生活を覚悟し、事前に生活レベルのハードルを下げていた。だから、首都の快適なゲストハウスに住めるのは⑨嬉しい誤算だった。

研究所のババ所長に挨拶したいところだが、海外出張中で、翌日戻るとのこと。研究者以外のスタッフは英語がしゃべれないので、「ボンジュール」とフランス語で挨拶を交わす。インターネットが繋がるので、家族に無事を知らせるメールを送る。

研究所には、セキュリティと呼ばれる門番がいる。彼が気を利かせて、昼飯にヤギ肉のサンドイッチとコカコーラを買ってきてくれた。日本でサンドイッチといったら食パンで具材を挟んだものだが、こちらでは、一刀両断しない程度にフランスパンに切り込みを入れ、そこに具材を挟んだものをサンドイッチと呼んでいる。具材は、ヤギ肉のミンチとタマネギをウスターソースで煮込んだものと、みっちり詰まったフライドポテト。コカコーラの缶はお馴染みの赤色だが、文字はアラビア語表記。国は違えど安定の美味さだ。午後は荷物の整理で、あっというまに潰れてしまった。

晩飯は、研究所のお抱えコックがゲストハウスに来て料理してくれることになった。メニューは、「鶏の丸揚げのタマネギソースがけ」だ。その日、ゲストハウスに泊まりに来たアメリカ人のキースさんと一緒に食べることになった。

キースさんはローマにあるＦＡＯ（国際連合食糧農業機関）に勤め、アフリカのバッタ問題を担当している。バッタがどこでどのくらい発生しているか、被害国から2週間おきに情報を収集し注意を促す指令――「バッタ注意報」を管理する

任務にあたっていた。詳しく話を伺うと、サバクトビバッタの大群を何度も見たことがあり、アフリカの色んな国に出向いてバッタ防除を手ほどきする世界的なエキスパートだった。今回、キースさんは、モーリタニアのバッタ研究所の視察に訪れていた。見学がてら、私も視察に同行させてもらうことになった。

（前野ウルド浩太郎『バッタを倒しにアフリカへ』より）

注1　「モーリタニア」……アフリカ西部の大西洋岸の国。作物を食い荒らすバッタの大発生に悩まされている。

注2　「TOKYO／MAENO」……「トーキョー／マエノ」筆者の出発地と苗字の表示。

注3　「ガサ入れ」……住居や持ち物の検査のこと。

注4　「エキスパート」……専門家。

問1　――線①「命綱がほどけた気分」とは、どのような「気分」ですか。70字以内で説明しなさい。

問2　――線②「荒い鼻息」から、筆者のどのような気持ちが読みとれますか。――線②より後の本文中から18字でぬき出して答えなさい。

問3　――線③「お前が住む予定の住所はこの世に存在しない」と「係」が判断した理由がわかる一文を本文中からぬき出し、その初めの5字を答えなさい。

問4　――線④「盲点」（注：注意していても見落としているところ）とは、ここではどのような事態を指した表現ですか。説明しなさい。

問5　――線⑤「異変」とはどういうことですか。最も適切と思われるものを次の中より一つ選び、記号で答えなさい。

ア、この飛行機で到着しているはずの筆者が、全く姿を見せないこと。

イ、筆者の必死の説明が、係官に誤解されるどころか全く理解されないこと。

ウ、研究所が正式に招いた研究者なのに、係官に問題ある人物だと判断されたこと。

エ、他の乗客は問題なく入国できているのに、研究者だけが入国できないで留められていること。

問6　――線⑥「怒られた」のはなぜだと筆者はこのとき考えましたか。最も適切と思われるものを次の中より一つ選び、記号で答えなさい。

ア、筆者のウソのつき方が、自信満々で反感を買うものだったから。

イ、ビールを飲むことを禁じられている国で、飲酒を計画していたから。

ウ、イスラム教の国家では、飲酒だけでなく酒の持ち込みも禁じられているから。

エ、筆者が入国審査での手続きについて知らず、しかもあいまいな説明をくり返したから。

問7　――線⑦「なんたることだ」について、このときの気持ちを、のちに筆者は理由もふくめてひとことで表現しています。その表現として最も適切と思われる語句を本文中より4字でぬき出して答えなさい。

問8　――線⑧「ゲストハウス」とは、ここではどういうことが目的で作られた建物だと考えられますか。最も適切と思われるものを次の中より一つ選び、記号で答えなさい。

ア、大事な客をもてなして喜んでもらうこと。

イ、遠くから来た研究者を受け入れて宿泊させること。

ウ、研究所の存在意義を理解してもらうための宣伝になること。

エ、文化の異なる国からの訪問者にも不自由なく暮らしてもらうこと。

問9　――線⑨「嬉しい誤算」について

(1)「嬉しい誤算」とはどういうことですか。その説明として最も適切と思われるものを次の中より一つ選び、記号で答えなさい。

ア、日本とは大きく異なるテロなどの安全上の問題点を、幸運にも考えずにすむ環境だったということ。

イ、空港での経験から、厳しい研究生活になるだろうと覚悟していたが、幸運にも環境が良かったということ。

ウ、本来は必要ない心配にとらわれていたが、研究所の心配りにより、幸運にも考えすぎに気付いたということ。

エ、厳しい生活環境になることを予想していたが、幸運にも快適な環境で、予想がいい意味で裏切られたということ。

(2)　筆者の入国後、この国で生活をしながら研究を進めるにあたって、筆者にとって幸運だと思われる具体的な出来事がありました。それを3つあげるとすれば、どのようなことですか。簡潔に書きなさい。

四　五木島に住む高校3年生の航太が通う五木分校は、再来年の春、廃校になる。引退を控えたバスケットボールの大会が、後輩のけがのため出場が絶望的になり、高校最後の夏を持て余していた航太は、クラスメートの河野日向子から俳句甲子園に誘われた。俳句に縁のなかった航太だが、河野の熱意に感心し、後輩の和彦や京と共に俳句に触れていく中で、俳句甲子園を目指してみたいと思い始める。そのためにはあと一人メンバーが必要で、航太は、「一番有望だ」と河野が評し、勧誘を一度断られた幼なじみの恵一を、やはり仲間に引き込むしかない、と訪ねる。次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。（ぬき出しと字数が決められている問題は、すべて「、」「。」記号などを字数にふくみます。）

「おかえり、恵一」

お母さんが①精一杯明るい声を出したように見えた。でも、恵一は口の中でもごもごと挨拶らしいことをつぶやいただけだ。お父さんのほうは何も言わない。

恵一とお父さんは、廊下で、肩をぶつけるようにすれ違った。どちらも無言。恵一はそのまま茶の間に入ってきて、すわっている航太を見て初めてちょっと表情を動かした。

「お。来てたんだ」

「うん。……ちょっと話があってさ」

「さあさあ、航太君、食べて食べて。ほら、恵一もすわりなさい」

恵一は航太の隣にすわり込むが、何の用かとも聞かない。

――うちの中で、何かまずいことがあったのかな。

ここに恵一と二人だけでいるのなら聞いてみたいところだが、お母さんがいる。一生懸命に話題を見つけてくれようとしているのがわかるので、航太も愛想よく返事を返す。

なんだか、この間の晩の航太の家みたいだ。

食後、二階の恵一の部屋に落ち着いたところで、ようやく緊張がほぐれた。すぐそこは漁港だ。潮風が港の匂いを運んで

くる。

「なあ、お父さんと何かあったのか」

すると、意外に素直に恵一は口を開いた。

「進路のことでもめてる。須賀との面談でおれが大学進学希望って言ったら、親父が怒り狂った」

「あ、恵一、受験するつもりなんだ……」

そりゃそうか。でなけりゃ、あんなに熱心に勉強なんかしてないか。

「とにかく、おれは漁師になるなんてまっぴらだからな」

一人息子がにべもなくはねつけたから、お父さんも頭に血が上ったのかもしれない。

航太は大きくため息をついた。

「うまくいかないもんだな。うちと逆だ。おれは家業を継ぎたいっていうのに、親父は聞く耳持たないんだから」

②そんなことより、なんだよ、話したいことって」

「あ、そうだった」

航太は今夜押しかけた目的を思い出した。

だが、今はタイミングが悪いかもしれない。どう見ても恵一の機嫌がよくなさそうだから。

このまま帰ろうか。

「うーん、③また明日にするわ」

「変な奴」

恵一はそれ以上突っ込もうとはしない。

航太が立ち上がって自分のリュックを肩にひっかけようとした時だ。勢いがよすぎて、恵一の机にリュックがぶつかった。何冊かの本が落ち、そのうちの一冊に挟まっていた写真がのぞく。

「あ……」

恵一がそう声を上げた時には、航太はもうその写真を何気なく拾い上げていた。
ずいぶん古い。今より若い恵一のお母さんと、その陰に隠れるように恵一がいる。二人が乗っているのは小型のボート――釣り舟かもしれない――だ。恵一、まだ小さい。お母さんのズボンのベルトくらいの背の高さしかない。だけど、幼稚園時代からずっと一緒にいる航太が見間違うはずはない。これは十年以上前の恵一だ。
「かわいいな、お前」
そう言ってその写真を恵一に向ける。自動的に、写真の裏が航太の目に入った。
『××年、五月』とメモ書きがされている。
だが、その日付のほかにも、別の、航太がよく知っている筆跡で何か書き添えられている……。
「おい」
あわてたように恵一が④写真をひったくったが、航太の目には、全部しっかりと焼きついてしまったあとだった。

手放せる鮎「母」は「舟」に似ている

その写真を、恵一は乱暴に机の中に放り込む。
「なあ、恵一、今の、お前の俳句だろ」
少し前の航太だったら、あれが俳句とは気づかなかったかもしれない。だが、連日河野と義貞先生にしごかれている今ならわかる。破調だけど十七音、そして「鮎」は夏の季語。
今のは、俳句だ。
思いがけず、恵一の耳が赤く染まっている。
「見せるつもりはなかったんだ。誰にも。勝手にのぞくな」
航太が黙っていると、恵一はうつむいたままで言葉を続ける。

「偶然、今の写真を見つけたんだ。小学生の頃。家族のアルバムに貼ってあったんだけど、一目見た時、なんだかいやな思い出が頭の中に湧いてきて、だから自分の本の中に隠したんだよ。そうすれば誰も見ないと思って」
「いやな思い出って？　その写真の恵一、たぶん幼稚園か、下手したらもっと小さいよな？」
「それが、よく思い出せないんだ。ただ、あの舟の上でいやなことがあった、それしか覚えていない。たぶん、おれがせっかくつかまえた鮎を、親父に取り上げられて川に放り込まれたんだ」
「せっかく獲ったのに？　どうして？」
「知らないよ、そんなこと。おふくろにそれとなく聞いたけど、何も覚えていないみたいだった」
――お父さんに確かめてはいないのか。
「小学生のおれは、この写真を自分の本の間に隠した。そのままずっと忘れていた。ついこの間偶然見つけたらそのいやな気分がまたよみがえっちまって、それをなんとかしたくて……」
「それで今の俳句作ったのか？」
「ああ。作ったら、おれとしてはもう整理がついたのさ。おれにとって俳句というのはそういう道具だから」
「道具？」
「こうやって句にして、気持ちをすっきりさせる道具だよ。それだけのものさ。だからもういい」
「それだけのもの、か」
航太は自分の気持ちを持て余して、そうつぶやく。「『それだけ』なんて言っちゃうんだ。本当は大事にしているくせに」
航太の声音に何か感じたのか、恵一が顔を上げた。
「どういうことだ？」
自分でも自分の気持ちが全部つかめているわけではない。でもとにかく、航太は全部恵一に話してみようと思った。
「恵一、お前、すごい発想できるんだな。おれ、河野にせっつかれて俳句を作ろうとしているけどさ。いくら頑張ったって、標語みたいなものしかできないんだよ。今の写真、お前ら家族で鮎を釣ってたんだよな。だけど、そこからどうして、『母』

は『舟』に似ているなんて、全然関係ないフレーズを思いつくんだよ。おれがやったらきっと、鮎が釣れたら舟が揺れたとか、そんなもんしか作れないのに」

言葉を吐き出しているうちに、航太は自分の気持ちに気づいた。⑤これは嫉妬だ。恵一の頭がいいことはそりゃ、わかっている。でも、自分にできないことをやすやすとやってのけて、しかもその能力を「それだけのもの」で片づける。

腹を立てて当たり前じゃないか。

「航太、何を怒っているんだ？」

恵一は不思議そうな顔をしているが、航太は頬をふくらませて黙り込んだ。

よくよく考えてみれば、恵一に怒るのは理屈に合わない。自分がみじめになるだけだ。でも。

河野の言い分を思い出す。

——もったいない。

今なら、河野のあの言葉が身に染みてわかる。

「おい、恵一、⑥おれたちと一緒に俳句を作れ。俳句甲子園に行くぞ」

「はあ？」

恵一があっけにとられた声を出す。「お前まで何を言い出すんだよ、河野みたいに」

「今なら河野の考えがもっともだとわかるんだよ。お前の才能、もったいない。おれたちがその才能を必要としているのに御託[注2]を並べて拒否するなんて、ずうずうしい」

「ずうずうしいって、お前……」

「いや、言い方が悪かった。頼む、お前のその才能がほしい」

「待てよ、航太」

恵一がすわり直す。ようやく、航太が本気だということは飲み込めたようだ。

「航太が勝手に参加するのはいいさ。だが、おれを巻き込むな」

「いいじゃないか。できないことをやれって言ってるんじゃない、お前ならできるから力を貸してくれって頼んでるんだ。どうしてそこまで意固地になるんだよ」

「意固地なのはそっちだ」

恵一は指を突きつけた。「そんなにわからないなら、一度だけ説明してやる。⑦おれの俳句はおれだけのものだ。みんなで語り合うものじゃない。俳句甲子園、お前は知らないだろうが、おれは散々見ているんだよ。句を真ん中に置いて、ああだこうだ、作者でもない奴らが言いたいことを言い合う。それを審査員という名の俳人が点数をつける。でもな、その審査員の点数だって、時には同じ句に六点つける俳人と九点つける俳人がいるんだよ。そんな評価のどこに客観性があるって言うんだ？　あんな試合仕立ての内容に納得なんてできやしない。おれの俳句に他人が勝手な解釈をするなんて、願い下げだ」

「自分の俳句に他人が勝手な解釈をするな、か」

今までの航太なら、そこで引き下がっていたのかもしれない。⑧だが今は違う。今日、体験したじゃないか。

航太にはわからなかった航太の句のよさを、仲間が見つけてくれた。

恵一には、俳句の才能がある。物知りだから、航太の知らないこともたくさん知っているだろう。でも知らないことだって、航太が気づかせてやれることだってあるのだ。

京に俳句をするように説得した時、河野が気づかせたように。

——そうだ、あの時、河野は京に何を持ちかけたんだっけ？

航太は恵一に詰め寄った。

「なら、恵一、おれと賭けをしろ」

「賭け？　どんな？」

⑨「さっきの句に、恵一の思いもつかないような解釈をしてやる。で、その解釈もありだとお前に納得させる。それはつまり、お前の句がお前のものだけじゃないと証明するってことだろう？　それに成功したら、おれたちが新しい鑑賞を見つけたら、こっちの勝ちだ。おれたちの仲間になれ」

（森谷明子『南風吹く』より）

注1　「にべもなく」……そっけなく。
注2　「御託を並べる」……自分勝手で偉そうな言葉をならべる。

問1　――線①「精一杯明るい声を出した」とありますが、それはなぜだと考えられますか。最も適切なものを次の中より一つ選び、記号で答えなさい。
ア、恵一の帰りが遅く、訪ねてきた航太が帰ってしまうかもしれないと心配して焦っていたため。
イ、恵一と父親の間のぎくしゃくした気まずい空気を少しでも軽くしたいと思っていたため。
ウ、疲れきって遅く帰ってきた恵一に、早くご飯を食べてしまってほしいと促すため。
エ、言葉数の少ない恵一と父親だけでは、家の中が暗くなってしまうため。

問2　――線②「そんなことより」とありますが、このときの恵一の気持ちとして、最も適切なものを次の中より一つ選び、記号で答えなさい。
ア、父親との不仲を知られて気まずいが、珍しく訪ねてきた航太の話をとにかく聞きたいと思っている。
イ、航太の進路の悩みは自分の悩みとは質が違うもので、自分には関係ないと思っている。
ウ、自分の抱える進路の悩みをつい話してしまったが、その話題を切りあげようとしている。
エ、お互いに進路に悩んでいることを知って、心強く思い、自分にできることを探そうとしている。

問3　――線③「また明日にするわ」と、航太が言ったのはなぜですか。説明しなさい。

問4　――線④「写真をひったくった」とありますが、それはなぜですか。50字以内で説明しなさい。

問5　――線⑤「これは嫉妬だ」とありますが、航太が恵一のどのようなところに嫉妬しているのかが分かる具体的な事例をふくむ一文を探し、その最初の5字を答えなさい。

問6　――線⑥「おれたちと一緒に俳句を作れ」とありますが、この時の航太の気持ちとして、最も適切なものを次の中より一つ選び、記号で答えなさい。
ア、恵一の俳句の才能を評価しているからこそ、父親とけんかをして不機嫌になっている恵一に、本来のやる気を取り戻してほしいと思っている。
イ、仲間と一緒に作る俳句の楽しさを恵一にも知ってもらい、才能のある恵一からいろんなことを教わって、自分もっと俳句が上手になりたいと思っている。
ウ、才能があるのに使おうとしない恵一に感じた嫉妬をもてあましながら、わざと恵一が困るような提案をするほど腹立たしく思っている。
エ、自分は頑張っても思うような俳句が作れないのに、能力があるにもかかわらず、俳句を表に出そうとしない恵一の才能をもったいないと思っている。

問7　――線⑦「おれの俳句はおれだけのものだ」とありますが、これは恵一のどのような思いから出た言葉ですか。俳句甲子園に対する恵一の見方もふくめて、説明しなさい。

問8　――線⑧「だが今は違う」とありますが、それはどうしてですか。最も適切なものを次の中より一つ選び、記号で答えなさい。

ア、航太は、仲間と共に俳句を作り鑑賞しあう実体験から、その楽しさや充実感、自分が気づかないことを仲間が気づかせてくれることを知ったから。

イ、恵一は他人を寄せ付けないところがあるが、航太は一緒に一つのものを目指して力を合わせる友人の存在の大きさを知っていたから。

ウ、俳句甲子園に出るために、連日、俳句の特訓をするようになって、航太は俳句作りのコツや技巧、発想の方法など楽しさが分かってきたから。

エ、航太が作った俳句の本当の良さは、自分で考えていたものよりも、周りの仲間が見つけてくれたものの方がより良いものだと気づいたから。

問9　――線⑨「お前の句がお前のものだけじゃない」とありますが、これはどういうことですか。最も適切なものを次の中より一つ選び、記号で答えなさい。

ア、俳句は作者だけがその良さを理解するものではなく、他の人も作者と同じ経験をすれば句を理解し、共感できるようになるということ。

イ、作者の意図とは違っても、他人が予想外の良い解釈をし、その句の良さを見つけ、受け止めてくれることもあるということ。

ウ、俳句には作者の思いや経験がよみこまれるものであるが、その作者の思いは他の人でもよむことができるということ。

エ、俳句を生み出すのは作者のこだわりであるが、俳句を鑑賞するのは他人であり、それが俳句の価値を決めるのだということ。

平成二十年度　中等部入学試験　第一回（国語）解答用紙

（◆印の部分は何も書かないこと）

一

(1)

(2)

(3)

(4)

(5)

二

(1)

(2)

(3)

(4)

(5)

三

問1　10　70　50　30　10

問2　18

問3

問4

問5

問6

問7

問8

問9

(1)

(2)　・　・　・

四

の解答欄は裏面にあります。

受験番号

氏　名

四

問9	問8	問7	問6	問5	問4			問3	問2	問1
					50	30	10			
					40	20				

四